価格の安定めざすホッキ蓄養

増殖部　寺井勝治

安い時は最高値の四分の一から五分の一となるホッキガイの価格安定をめざして白糠漁協組の陸上施設で本格的なホッキガイの蓄養試験を実施中である。昨年四月から七月にかけて全道初の長期蓄養テストで明るい見通しが立てられ、少くなりつつある沿岸の貴重な資源から有効に安定収入をかせごうという試みである。

同漁協組の漁期は十一月から翌年の六月一五日まで、ところが全道的な需要と供給の関係でムキ身の値段は激しい浮き沈みの連続、正月前後は一Kg当り一、〇〇〇円前後するのに、春の最盛期は三〇〇円程度にくずれ、また六月一六日の禁漁期入りに向けて値上り漁期最終日に最高値一、九六六円となつている。

この値段のバランスをとろうと蓄養方式を取り入れた。四月ころの安いホッキガイを三ケ月から四ケ月蓄養して禁漁期の高値の時に出荷するという方法である。

昨年の四月、テスト水槽六面をつくり海水を給水循環させ酸素を充分補給するようにしホッキガイは側面に穴のあいたポリ魚函に一五個体程度を入れ、各魚函を積み重ね配列方式で水槽を立体的に有効に使用し、一水槽に約七〇〇Kgから八〇〇Kgを収容し四月末に蓄養試験を開始した。

その結果は四月から六月にかけての蓄養期間中の死亡わずか三%前後という好成績で、そのうえ①海水をできるだけ常時給水、または循環させているので蓄養中の活力減、重量減は殆んど見受けられない。②海底とちがい泥を吸わないばかりか、かえつて泥をはき出すので身がきれいという長所もあつて再出荷時には一Kg当り二、四二〇円で蓄養開始時の四倍の値であつた。

この蓄養試験をとおして、まだ多くの蓄養技術の問題も残つているので今後引続き試験を実施する。